

早稲田大学 教育学研究科
修士課程 入試問題の訂正内容

<外国学生入試 国語教育専攻>

【専門科目・共通】

●問題冊子 11ページ :〔共通B〕本文18行目

(誤)

一一世紀、南宋の時に・・・

(正)

一二世紀、南宋の時に・・・

●問題冊子 12ページ :〔共通B〕本文1行目～2行目

(誤)

～と言った解すれば

(正)

～と言ったと解すれば

以上

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目】 【国語教育専攻】

解答上の注意

一、国語教育専攻の入学試験問題は、「専門科目・選択」（配点60％）と「専門科目・共通」（配点40％）に分かれています。

①「専門科目・選択」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（選択一〜選択七）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・選択」で 解答すべき問題
国語科教育研究指導	幸田 国広	選択一 国語教育
国語科教育研究指導	菊野 雅之	
日本語学研究指導	松本 正恵	選択二 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	松本 直樹	選択三 古典文学 I 上代文学
国文学研究指導	新美 哲彦	選択四 古典文学 II 中古文学
国文学研究指導	福家 俊幸	
国文学研究指導	田淵 句美子	選択五 古典文学 III 中世文学
国文学研究指導	内山 精也	選択六 中国古典文学
国文学研究指導	石原 千秋	
国文学研究指導	金井 景子	選択七 近代文学
国文学研究指導	五味渕 典嗣	
国文学研究指導	和田 敦彦	

②「専門科目・共通」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（共通A〜Dのいずれか一問）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・共通」で 解答すべき問題
日本語学研究指導	松本 正恵	共通A 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	内山 精也	共通B 中国古典文学
国文学研究指導	石原 千秋	共通C 近代文学
国文学研究指導	五味渕 典嗣	共通D 近代文学

- 二、解答用紙は、「問題番号」ごとに一枚使用すること。全ての解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名、ならびに「問題番号」（例「選択八」・「共通A」など）を必ず記入すること。
- 三、解答用紙のホッチキスは、はずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。
- 四、問題用紙は「十五枚」（本ページ含む）、解答用紙は「二枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

「選択一」 国語教育

※解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次のA～Hのうちから三題を選び、それぞれ簡潔に説明しなさい。

- | | |
|--------------|------------------|
| A キー・コンピテンシー | B 知徳ノ啓発 |
| C 「みんないいこ」読本 | D 探究的な学習のプロセス |
| E 筆者想定法 | F 一読総合法 |
| G 調べる綴方 | H 「情報の扱い方」に関する事項 |

二、次のI～Nのうちから二題を選び、具体的に論じなさい。

- | |
|------------------------------|
| I 一九〇〇年「国語科」成立の背景とねらい |
| J PISA読解力調査のねらいと特徴 |
| K 時枝誠記の古典教育論の特徴 |
| L 高校共通必修修科目「現代の国語」と「言語文化」の性格 |
| M 随意選題論争における友納友次郎の綴方教育観 |
| N 「言葉による見方・考え方」とは何か |

三、児童・生徒の「不読率」に関する近年の傾向をふまえて、あなたは国語科における読書指導の在り方をどう考えるか。近年の特徴的な読書指導の方法等に触れながら、対象とする学校種を明確にした上であなたの考えを述べなさい。

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択二〕 日本語学

一 次のA～Lの事項のうちから四題を選び、説明しなさい。（解答の際には、選択した問題番号を明記すること。）

A	一語文	B	連濁	C	アーミー・メソッド
D	ヲコト点	E	女房詞	F	『分類語彙表』
G	とりたて	H	あいづち	I	和漢混淆文
J	橋本進吉	K	方言区画	L	社会言語学

二 次のM～Oのうちから一題を選び、具体的に論じなさい。（解答の際には、選択した問題番号を明記すること。）

- M 仮名遣いの歴史と「現代仮名遣い」の問題点について
- N 現代日本語接続表現（接続詞・接続助詞・複合的接続表現等を含む）の体系と機能について
- O 日本語研究・日本語教育における談話分析研究の有用性について

三 日本語学とはどのような学問か。専門外の人にもわかりやすいように、具体例を交えながら、学問領域・研究対象・研究方法・研究の意義・研究の応用可能性等について多角的に述べなさい。

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択三〕 古典文学（I） 上代文学問題

一、次の（A）～（D）のうちから、二題を選択して論述しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- （A）『古事記』中巻の構成
- （B）『日本書紀』神代巻の「一書曰」
- （C）「風土記」の編纂事業
- （D）初期万葉歌の特徴

二、次の（E）～（K）のうちから、三題を選択して簡潔に（一題あたり解答用紙五行以内）説明しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- | | | | |
|---------|----------|----------|--------|
| （E）雄略天皇 | （F）洪水神話 | （G）高橋虫麻呂 | （H）国見歌 |
| （I）七夕歌 | （J）風土記逸文 | （K）延喜式祝詞 | |

三、上代文学作品の享受史を踏まえ、古典文学を学ぶことの意義について、具体的かつ簡潔に（解答用紙一〇行以内）考えを述べなさい。

（上代文学問題、以上）

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択 四〕 古典文学(Ⅱ) 中古文学

※解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次の(A)～(D)のうち、二題を選択して論述せよ。

- (A) 『伊勢物語』と古注釈
- (B) 『紫式部日記』の特質
- (C) 『源氏物語』と漢詩文
- (D) 『源氏物語』の享受

二、次の(E)～(M)のうち三題を選択して、簡潔に説明せよ。

- (E) 『うつほ物語』
- (F) 『後撰和歌集』
- (G) 『落窪物語』
- (H) 『大和物語』
- (I) 『和泉式部日記』
- (J) 『蜻蛉日記』
- (K) 藤原定子
- (L) 草子地
- (M) 平安時代の文学における召人

三、中古文学を学校教育で学ぶ意義とは何か、あなたの考えを述べよ。

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択五〕 古典文学 (Ⅲ) 中世文学

一、次の①～⑧の中から二題を選択して、詳しく論述しなさい。

- ① 鎌倉前期の政治と文学について
- ② 中世の都と地方の文学について
- ③ 題詠歌と本意について
- ④ 『平家物語』の成立について
- ⑤ 教訓書の文学史的展開について
- ⑥ 古今伝授について
- ⑦ 天皇家と勅撰和歌集について
- ⑧ 古筆切研究について

二、次の①～⑩の中から三題を選択して、簡潔に説明しなさい。

- ① 百人秀歌
- ② 愚管抄
- ③ たまきはる
- ④ 無名抄
- ⑤ 神道集
- ⑥ 後鳥羽院御口伝
- ⑦ 保元物語
- ⑧ 沙石集
- ⑨ 増鏡
- ⑩ 野守鏡

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択六〕 中国古典文学 問題

〔一〕 次の文は宋・欧陽脩「醉翁亭記」の一節である。この文を読んで、設問に答えなさい。

環滁皆山也。其西南諸峰、林壑尤美。望之蔚然而深秀者、琅琊也。山行六七里、漸聞水聲潺潺、而瀉出於兩峰之間者、釀泉也。峰回路轉有亭、翼然臨于泉上者、醉翁亭也。作亭者誰、山之僧智僊也。名之者誰、太守自謂也。太守與客來飲于此、飲少輒醉、而年又最高、故自號曰醉翁也。醉翁之意、不在酒、在乎山水之間也。山水之樂、得之心、而寓之酒也。……中略……已而夕陽在山、人影散亂、太守歸、而賓客從也。樹林陰翳、鳴聲上下、遊人去、而禽鳥樂也。然而禽鳥知山林之樂、而不知人之樂。人知從太守遊而樂、而不知太守之樂其樂也。醉能同其樂、醒能述以文者、太守也。太守謂誰、廬陵歐陽脩也。

〔設問一〕 傍線①「太守……酒也」を、口語訳しなさい。

〔設問二〕 傍線②「人知……守也」について、(A)・(B)二つの問いに答えなさい。

(A) すべて平仮名による書き下し文、または現代中国語の発音記号(拼音)表記に改めよ。

(B) 口語訳しなさい。

〔設問三〕 作者欧陽脩の文学史的功績について簡潔に説明しなさい。

〔二〕 次のア～オの中から一つを選択し、その記号を解答欄に記した上で、説明ならびにあなたの考えを記しなさい。

ア 「文言」と「白話」の文体的相違について

イ 「詩言志」について

ウ 科挙と詩について

エ 「漢文」が「国語」に含まれる理由について

オ 日本漢詩文がもつ国語教材としての意味について

〔三〕 次の(A)～(J)の中から三つの項目を選び、それぞれの文学史ないしは文化史的意味を中心に説明しなさい。

(A) 「離騷」

(B) 『文選』

(C) 漢賦

(D) 閨怨詩

(E) 『搜神記』

(F) 韓愈

(G) 蘇軾

(H) 『康熙字典』

(I) 「鶯鶯伝」

(J) 胡適『白話文学史』

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

「選択七」近代文学

一 日本の近代文学の始まりについて、あなたの考えるところを述べなさい。

二次の(A)～(E)の中から一題を選択して論じなさい。

- (A) 新体詩について
- (B) 新感覚派の文学について
- (C) 日本浪漫派について
- (D) 私小説について
- (E) 日本近代文学とメディア研究について

三次の(A)～(G)の中から三題を選択して説明しなさい。

(「」は作品名、『』は雑誌名を示す)

- (A) 樋口一葉 (B) 「別れたる妻に送る手紙」 (C) 『三田文学』
- (D) 有島武郎 (E) 「蟹工船」 (F) 『新青年』
- (G) 「街とその不確かな壁」

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】
【国語教育専攻】

【共通A】 日本語学（含日本語教育） 松木正恵

次の文章は、今井むつみ・秋田喜美『言語の本質——ことばはどう生まれ、進化したか——』（二〇二三年五月中公新書）の第3章「オノマトペは言語か」のまとめ部分から引用したものである。（二部省略した箇所がある。）この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本章では、広く論じられている言語の十大原則——コミュニケーション機能、意味性、超越性、継承性、習得可能性、生産性、経済性、離散性、恣意性、二重性——をオノマトペが満たしているかどうかという観点から「オノマトペは言語か」という問いを考えた。

本章での考察をまとめると表3-1のようになる。オノマトペと一般語だけでなく、明らかに言語ではない、口笛、咳払い、音真似、泣き声などの非言語音と比較して考察した。口笛と咳払いについては、通常は個人的な活動であるものの、特定の場面においては感心や警告を示すという明確なコミュニケーション機能を持っている。そのため、コミュニケーション機能、意味性、咳払いについては継承性にも「×」と「○」の両方を並べてある。オノマトペは、アイコン性²と恣意性を体系的に兼ね備えているため、恣意性と二重性に「△」を添えている。なお、明確な結論が得にくいために考察対象から外した点については、空欄となっている。

表3-1 一般語、オノマトペ、非言語音の言語性

	一般語	オノマトペ	口笛	咳払い	音真似	泣き声
コミュニケーション機能	○	○	×/○	×/○		
意味性	○	○	×/○	×/○	×	×
超越性	○	○	×	×		
継承性	○	○	○	×/○		×
習得可能性	○	○				
生産性	○	○	×	×	×	×
経済性	○	○	×	×	×	×
離散性	○	○	×	×	×	×
恣意性	○	△	×	×	×	×
二重性	○	△	×	×	×	×

表3-1を見れば、口笛、音真似などと比較して、オノマトペは明らかに多くの言語的特徴を満たしている。さらに、2000年代以降には、言語学の中で、そもそも言語は恣意的でなければならないというソシュール・ホケットの考えに反対する考えが次々に表明されてきており、言語が身体につながっていることを示す実証データが蓄積されるようになった。つまり、言語の恣意性というゴールドスタンダード自体が揺らぎ、「言語は身体的である」という理論が広く受け入れられるようになってきたのである。

数多く存在する実証データの中で、とくにこのことを端的に示したのが、子どもの言語習得におけるオノマトペの役割を明らかにした一連の研究と、オノマトペの脳内処理に関

する研究で、どちらも筆者（今井）が一翼を担ってきた。

言語は身体とつながっているという考えにとって、言語的な特徴を多く持ちながら、言語でない要素もあわせもつというオノマトペの性質はうまく合致する。言語の身体性をどこまでも強調していくと、「言語のすべてが身体につながっているのか」という問いに行き着きそうだが、ただ「はじめに」ではっきり述べたように、言語はあくまでも極度に抽象的な記号の体系である。このことは間違いない。すると、身体と、言語という抽象的な記号の体系の間を、何かで埋める必要があるのである。

本書の冒頭で投げかけた問いを思い出してほしい。発生当初から言語はこのように、抽象的で複雑で巨大なシステムだったとは考えにくい。子どもも当初から巨大なシステムを持っているはずがない。子どもはどのようなことを最初に覚えるのか、どのように言語が記号のシステムであることを理解し、どのようにこのような抽象的な意味を持った巨大なシステムを習得し、自分の身体の一部にしていくのかという問いである。

この問題を考える上で、言語の特徴を持ちながら身体につながり、恣意的でありながらもアイコン性を持ち、離散的な性質を持ちながらも連続性を持つというオノマトペの特徴は、ミッシングリンクを埋める有望なピースとなる。言語の進化においても、今を生きる子ども

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
 修士課程 外国学生入学試験問題
 【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

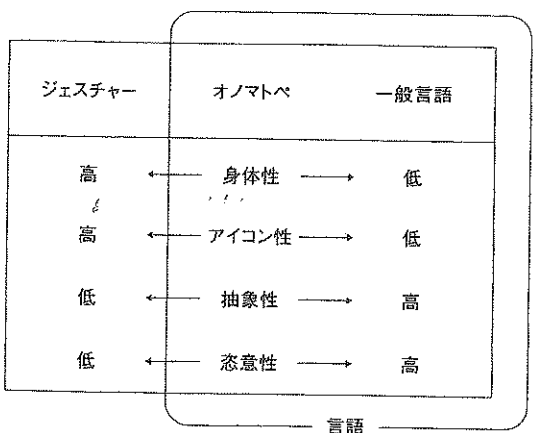


図3-2 身体と一般言語をつなぐオノマトペ

の言語の習得においても、オノマトペは、言語が身体から発しながら身体を離れた抽象的な記号の体系へと進化・成長するつなぎの役割を果たすのではないか(図3-2)。

実際、筆者(今井)が2〜3歳の子どもとその親とのやりとりを観察した研究では、親はその場にあるものよりも、ないものを言い表す際に、オノマトペやジェスチャーを多く用いた。オノマトペとある種のジェスチャーは、ともにアイコン的な記号である。親のこうした行動は、対象との $\square$ 性を頼りに、子どもをイマ・ココを超えた世界へと誘うのだ。

問1 「言語の十大原則」のうち、傍線部1「超越性」・傍線部2「生産性」・傍線部3「経済性」・傍線部4「離散性」について、それぞれの言語としての特徴を、具体例等を挙げながら説明しなさい。

問2 傍線部5「オノマトペは、アイコン性と恣意性を体系的に兼ね備えている」とあるが、これはオノマトペのどのような特質について述べたものか。具体例を挙げてわかりやすく説明しなさい。

問3 傍線部6「そもそも言語は恣意的でなければならないというソシュール・ホケットの考え」とはどのようなものか。詳しく説明しなさい。

問4 波線部A「オノマトペは言語か」という問いかけについて、自分なりの考えをまとめなさい。

問5 波線部B「言語は身体的である」とはどのような意味か。本文の趣旨を踏まえて説明しなさい。

問6 波線部C「子どもの言語習得におけるオノマトペの役割」とはどのようなものと考えられるか。本文の記述を参考にしながら、自分の考えを自由に述べなさい。

問7 Dに入る二字漢語を考えなさい。

以上

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

〔共通B〕 中国古典文学（内山精也）

次の文章（川合康三「古いは新しい、新しいは古い」、『中国古典文学彷徨』所収）を読み、後の問いに答えなさい。

「一日千秋の思いで待つ」という言い方がある。何かをひたすら待っている時、その時間は客観的に計測される時間よりもずっと長く感じられる。この「一日千秋」ということは、中国の最も古い詩集『詩経』のなかの「采芣」——クズを採る——という歌から出ている

彼^むこに芣^か（クズ）を採る、一日見^みわざれば、三月の如し。

彼^むこに芣^か（カワラヨモギ）を採る、一日見^みわざれば、三秋の如し。

彼^むこに艾^が（ヨモギ）を採る、一日見^みわざれば、三歳の如し。

素朴な歌であるけれども、単純な繰り返しのなかにも「三月」、「三秋」、「三歳」としだいに長い時間にすり替わっていくのは、待ち望む気持ちがいよいよ募っていく変化をあらわしているのだろう。「芣」、「芣」、「艾」と展開していく植物も、香りがいつそう強くなるとか、何かの漸増的変化を伝えていいるのかも知れない。

紀元前六、七世紀に編まれた、それゆえ唱われていたのはさらにさかのぼる古い古い歌のことばが、ほとんどそのまま今の日本語のなかにも生きていくというのは、考えてみれば驚くべきことだ。同じことばを使っているというのは、それがあらわす人のこころのありかたも共有していることになる。

この詩を素手で読めば、会えない異性を恋い慕う思いを唱っていると解するのが、ごく自然であろう。草摘みも恋の歌にふさわしい。しかしながら、^①伝統的な解釈はそうではない。前漢の注釈である毛伝、およびそれを承けた後漢・鄭玄の注（両者を「古注」という）によれば、これは出張した家臣が留守中に自分が誹謗されることを恐れた詩であり、そこには乱れた官界に対する批判をこめているという。——世紀、南宋の時に書かれた朱熹の注（「新注」）は、『詩経』の多くの詩篇を恋の歌として解釈しなおしているが、この詩に関しては「古注」とさして違いはない。

こうした過去の注釈は、私たちには無理なこじつけとしか思われない。が、このような意味付けを施されたおかげで、『詩経』は「詩の經典」、つまり文学の規範として権威づけられ、今日まで滅びることなく伝えられてきたのだ。儒家の理念が士大夫の文学を支配した中国では、文学も道德的、政治的であることが求められ、色恋の歌はそれだけでは湮滅してしまうのが常なのだから。

気持ちしだいで時間は長くも短くも感じられるという、人のこころと時間の関係が、「一日三秋」もしくは「一日千秋」という四字にまとめられているが（いずれも音律は仄仄平平という落ち着いた配置をもつ）、こころと空間の関係について語る例もある。『論語』のなかに引かれている「逸詩」、つまり『詩経』には収められなかった詩篇に、こんな句がある。

「豈^あに爾^{なんじ}を思^{おも}わざらんや、室^{むろ}の是^{こゝ}れ遠^{とほ}ければなり」。——君のことを思わないわけではない、ただ家が遠すぎるのだ。それに対する孔子のことばは、「未だこれを思わざるなり。それ何の遠きかこれ有らん」。——思つてなどいないのだ、（本当に思っていれば）遠いなんてことはありはしない（『論語』子罕篇）。

この条も昔の注は堅苦しい意味を読み取っているけれども、原文だけ素直に読めば、恋人を鬱陶しく思うようになった男が、住まいが離れていることをいいわけにして会えないと言っているように読

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

める。それに対して孔子が「気持ちがないだけだ。愛していれば距離なんて問題じゃない」と言った解すれば、孔子もなかなか男女の機微に通じていたことになる。恋人たちにとっては、時間のみならず、空間も伸縮自在だ。強い思いは距離を縮め、思いが薄れたら遠いものになる。近年の流行歌、「五番街のマリーへ」(阿久悠作詞)ではもう少し複雑な思いが唱われている。「五番街は近いけれど、とても遠いところ」。実際にはすぐ近くにあっても、過去に「悲しい思いをさせた」マリーの住む五番街は、気になりながら自分では尋ねて行けない「遠い」所なのだ。

ところで、「一日千秋」というけれども、私たちがそのことばを使う時、「ほんとうに」一日を千年のような長さを感じているのだろうか。時間が長く感じられるという感覚は確かにある。そんな感じが生じた時、私たちは「一日千秋」ということばと結びつけ、それを使うことによって自分の感情を表しているのだろう。言い換えれば、私たち自身が抱く漠然とした気持ちは、既存の語彙を借りることによって、より確かな、輪郭のはっきりした感情として定着する。ことは「一日千秋」といった成語に限られるものではない。私たちがここに抱く感情、思考、それを精神生活と呼ぶことにすれば、^②私たちの精神生活はこれまでに用意されてきたことば、そしてまたことばの組み合わせによって作られるさまざまな言語表現、そうしたものを枠組みとして営まれている。もしことばがなかったら、動物のような本能がないかぎり、人間にはどのような行き方が可能か、想像すらできない。私たちの精神生活を支えていることばは、文化と絡み合いながら、過去から伝えられてきたものなのだ。過去を切り離して生きていくことは、人間には不可能ではないだろうか。(後略)

〔問一〕『詩経』『采芻』の解釈について、傍線①「伝統的な解釈はそうではない」とあるが、(1)伝統的解釈がどのようなものであるかを説明した上で、(2)現代的解釈と大きな違いが生じた原因を本文の内容を踏まえつつ簡潔に説明せよ。

〔問二〕『詩経』の「逸詩」、「豈に爾を思わざらんや、室の是れ遠ければなり」の句を、孔子はどのように解釈したのか、本文の内容を踏まえて簡潔に説明せよ。

〔問三〕傍線②「私たちの精神生活……営まれている」は、現代の我々が意識するとしなないに関わらず、言語文化の伝統に取り込まれつつ、感じたこと思考したことを表現している、という言葉の力学を指摘したものである。この言葉の力学について、具体例を挙げつつ、あなた自身の考えを述べなさい。

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

【共通C】(石原千秋)

以下に示すのは夏目漱石『門』(一九一〇年)の冒頭部です。これを読んで、次のことについてあなたの考えを述べなさい。

①この夫婦の関係。

②文字がわからなくなるような状態を一例とした、宗助の精神状態

宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好さそうな所へ気楽に胡坐をかいてみたが、やがて手に持つてゐる雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。秋日和と名のつく程の上天気なので、往來を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、明らかに聞えて来る。脇枕をして軒から上を見上ると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでゐる。その空が自分の寐てゐる縁側の窮屈な寸法に較べてみると、非常に広大である。たまの日曜にこうして緩く空を見るだけでも大分違うなと思ひながら、眉を寄せて、ぎらぎらする日を少時見詰めていたが、眩しくなつたので、今度はぐるりと寐返りをして障子の方に向いた。障子の中では細君が裁縫をしてゐる。

「おい、好い天気だな」と話し掛けた。細君は、

「ええ」と云つたなりであつた。宗助も別に話したい訳でもなかつたと見えて、それなり黙つてしまつた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でも為ていらつしやい」と云つた。然しその時は宗助が唯うんと云う生返事を返しただけであつた。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寐てゐる夫の姿を覗いて見た。夫はどう云う見か両膝を曲げて海老の様に窮屈になつてゐる。そうして両手を組み合はして、その中へ黒い頭を突つ込んでゐるから、脇に挟まれて顔がちつとも見えない。

「貴方そんな所へ寐ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京の様な、東京でない様な、現代の女学生に共通な一種の調子を持つてゐる。

宗助は両脇の中で大きな眼をばちばちさせながら、

「寐やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それから又静かになつた。外を通る護謄車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。宗助は仕立卸しの紡績織の脊中へ、自然と浸み込んで来る光線の暖味を、襯衣の下で食はる程味いながら、表の音を聴くともなく聴いていたが、急に思ひ出した様に、障子越しの細君を呼んで、

「御米、近來の近の字はどう書いたつね」と尋ねた。細君は別に呆れた様子もな

く、若い女に特有なけたたましい笑声も立てず、

「近江のおうの字じゃなくつて」と答えた。

「その近江のおうの字が分らないんだ」

細君は立て切つた障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしょう」と云つたぎり、物指の先を、字の留つた所へ置いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顔も見ずに、

「やっぱりそうか」と云つたが、冗談でもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。細君も近の字はまるで気にならない様子で、

「本当に好い御天気だわね」と半ば独り言の様に云いながら、障子を開けたまま又裁縫を始めた。すると宗助は脇で挟んだ頭を少し擡げて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「何故」

「何故つて、幾何容易い字でも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。この間も今日の今の字で大変迷つた。紙の上へちゃんと書いて見て、じつと眺めてみると、何だか違つた様な気がする。仕舞には見れば見る程今らしくなくなつて来る。——御前そんな事を経験した事はないかい」

「まさか」

「己だけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「貴方どうかしていらつしやるのよ」

「やっぱり神経衰弱の所為かも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。夫は漸く立ち上つた。

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

【共通D】近代文学（五味渚）

次に示すのは、泉鏡花「眉かくしの霊」（『苦楽』一九二四年五月）の一節である。信州を旅していた「境」は、山あいの寂しい宿屋で、料理人の「伊作」と親しくなった。「境」はこの宿のもてなしを心地良く感じながらも、たびたび奇妙なできごとが起こることを訝しく感じている。文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「どっちです、白鷺かね、五位鷺かね」

「ええ——どっちもでございますな。両方だろうと思うんですが」

料理番の伊作は来て、窓下の戸ぎわに、がっしり腕組をして、うしろ向きに立って言った。

「むこうの山口の大林から下りて来るんでございます」

言の中にも顯われる、雪の降りやんだ、その雲の一方は漆のごとく森が黒い。

「不断のことではありませんが、……この、旦那、池の水が涸れるところを狙うんでございます。鯉も鮒も半分鱶を出して、あがきつかないのでございますから」

「りこうな奴だね」

「馬鹿な人間は困っちゃいます——魚がかわいそうでございますので……そうかと言って、夜一夜、立ち番をしてもおられません。旦那、お寒うございます。おしめなさいまし。……そちこち御註文の時刻でございますから、何か、不手際なものでも見繕って差し上げます」

「都合がついたら、きみが来て一杯、ゆっくりつき合ってくれないか。……私は夜ふかしは平気だから、いっしょに……ここで飲んでいたら、いくらか案山子になるだろう……」

「結構でございます。……もう台所は片附きました、追っつけ伺います。——いたずらな饞鬼どもめ」と、あとを口ごごとで、空を睨みながら、枝をざらざらと潜って行く。

境は、しかし、あとの窓を閉めなかった。もちろん、ごく細目には引いたが。——実は、雪の池のここへ来て幾羽の鷺の、魚を狩る状を、さながら、炬燵で見のお伽話の絵のように思ったのである。すわと言えば、追い立つるとも、驚かすとも、その場合のこととして……第一気もそぞろなことは、二度まで湯殿の湯の音は、いずれの間からか雪とともに、鷺が起ち込んで浴みしたろう、とそうさえ思っただけであった。

そのままじっと覗いていると、薄黒く、こそこそ雪を踏んで行く、伊作の袖の傍を、ふわりと巴の提灯が点いて行く。おお今、窓下では提灯を持つてはいなかったようだ、それに、もうやがて、庭を横ぎって、濡縁か、戸口に入りそうだと、思うまで距った。遠いまで小さく見える、としばらくして、ふとあとへ戻るような、やや大きくなって、あの土間廊下の外の、萱屋根のつま下をすれすれにだんだん此方へ引き返す、引き返すのが、気のせいだが、いつの間にか、中へはいって、土間の暗がりを点れて来る。……橋がかり、一方が洗面所、突当りが湯殿……ハテナとぎよっとするまで気がついたのは、その点れて来る提灯を、座敷へ振り返らずに、逆に窓から庭の方に乗り出しつつ見ていることであった。トタンに消えた。——頭からゾツとして、首筋を硬く振り向くと、座敷に、白鷺かと思う女の後ろ姿の頸脚がスツと白い。

違棚の傍に、十畳のその辰巳に据えた、姿見に向かった、うしろ姿である。……湯気に山茶花の消れたかと思う、濡れたように、しっとりとしについた藍鼠の縮小紋に、朱鷺色と白のいち松のくつきりした伊達巻きで乳の下に縋れるばかり、消えそうな弱腰に、裾模様が軽く靡いて、片膝をやや浮かした、襦を友染がほんのり溢れる、露の垂りそうな円鬚に、桔梗色の手絡が青白い、浅葱の長襦袢の裏がなまめかしく揃んだ白い手で、刷毛を優しく使いながら、姿見を少しこごみに覗くようにして化粧をしていた。

境は起つても坐るも知らず息を詰めたのである。

あわれ、着た衣は雪の下なる薄もみじで、膚の雪が、かえって薄もみじを包んだかと思う、深く脱いだ襟脚を、すらりと引いて掻き合わすと、ぼつとりとして膝近だった懷紙を取って、くるくると丸けて、掌を拭いて落としたのが、畳へ白粉のこぼれるようであった。

衣摺れが、さらりとした時、湯どのできた人膚に紛う留南奇が薫って、少し斜めに居返ると、煙草を含んだ。吸い口が白くつやつやと煙管が黒い。

トーンと、灰吹き音が響いた。

きつと向いて、境を見た瓜核顔は、目ぶちがふつくりと、鼻筋通って、色の白さは凄まじいよう。——気の籠もった優しい

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

眉の両方を、懷紙でひたと隠して、大きな瞳でじつと視て、

「……似合いますか」

と、につこりした齒が黒い。と、につこりしながら、襖を合わせぎまにすつくりと立った。顔が鴨居に、すらすらと丈が伸びた。

境は胸が飛んで、腰が浮いて、肩が宙へ上がった。ふわりと、その婦の袖で抱き上げられたと思ったのは、そうではない、横に口に引き寄せられて、畳を空に釣り上げられたのである。

山がまっ黒になった。いや、庭が白いと、目に遮ぎった時は、スツと窓を出たので、手足はいつか、尾鰭になり、我はびちびちと跳ねて、婦の姿は廂を横に、ふわふわと欄間の天人のように見えた。

白い森も、白い家も、目の下に、たちまちさつと……空高く、松本城の天守をすれすれに飛んだように思うと、水の音がして、もんどり打って池の中へ落ちると同時に炬燵でハッとわれに返った。

池におびたらしい羽音が聞こえた。

この案山子になど追えるものか。

バスケットの、薦の血を見るにつけても、青い呼吸をついでぐったりした。

廊下へ、しとしとと人の音がする。ハツと息を引いて立つと、料理番が膳に銚子を添えて来た。

「やあ、伊作さん。」

「おお、旦那。」

問一 傍線部「炬燵でハツとわれに返った」とあるが、「われに返」る前に「境」が体験したことを、順を追ってわかりやすく説明しなさい。

問二 この場面から読み取れる語りの特徴や表現上の工夫について、あなたの考えを述べなさい。

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験 解答用紙

【専門科目】

【国語教育専攻】

大学記入欄

選択
()

問題番号

↑

裏面に続く

↑

← 裏面を使用する場合に「」から記入する

↑

↑ 111#62

↑

研究指導	
教員名 ()	
受験番号	
氏 名	

二〇二四年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般・外国学生入学試験 解答用紙

【専門科目】

【国語教育専攻】

大学記入欄

問題番号

共通
()

裏面に続へ

↑

↑

裏面を使用する場合ここから記入すること

↑
いじめる

